

## 住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の  
立場に立って設計しています。  
お気軽にご相談下さい。

# 京都建築事務所

〒 604-8083

京都市中京区三条柳馬場東入中之町10

代表取締役社長 川下 晃正

TEL (075) 211-7277

FAX (075) 211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>



### クリエイツかもがわ

〒601-8382 京都市南区吉祥院石原上川原町21  
<http://www.create-k.co.jp>  
TEL 075 (661) 5741 FAX 075 (693) 6605  
送料何冊でも240円

おばあちゃん  
アルツハイマーという  
脳がちぎんでいく病気で

時間の順番が  
私とちがうみたい  
昔が今になって  
今がどっかへ行ってる……



これは ふつうの  
セルロイドの人形です  
私たちには……

藤川幸之助／さく 宮本ジジ／え

20×24.7cm 29頁 1800円＋税

あか  
赤ちゃん  
キューちゃん  
シリーズ  
第1弾！

全5巻

こころを  
伝える  
認知症

「認知症を伝える」ではなく「認知症で伝える」

認知症を知識として伝えるのではなく、認知症の本人、家族、周囲の人の  
思いやつながりから認知症を学び、こどもの心を育てます。

園や小学校、家庭で  
「認知症」が学べる  
総ルビ・解説付き

- 2 おじいちゃんの手帳 〈2020年5月発行予定〉 3 一本の線をひくと 〈2020年7月発行予定〉 4 赤いスパゲッチ 〈2020年9月発行予定〉 5 じいちゃん、出発進行！ 〈2020年11月発行予定〉



# 希望を胸に、みらいへ

2020年3月14日、あいにくのお天気でしたが、大阪福祉事業財団高鷺保育園の第53回卒園式をおこないました。少し緊張したようすの子どもたちは、担任に名前を呼ばれると大きな声で返事をし、ホール中央へ。園長先生から一人ずつ卒園証書を手渡してもらいました。



子どもたちと過ごした日々を思い返しながら、職員みんなで心を込めて歌をうたい、子どもたちを送りだします。



暑い日も寒い日も、雨の日も風の日も、毎日保育園まで送り迎えをしてくれたお父さんや  
母さん。手をつないで一緒に退場します。





残念ながら、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、例年より縮小しておこなった卒園式。心もからだもたくましく育った子どもたちが、小学校に行くことに期待をふらませ、卒園しました。

(写真 提供、文 福井愛子)

# ●特集● だれのための保育・教育?! “10の姿”と道德の教科化を考える

必要なのは“10の姿”ではなく、わかり合えるよろこび

平松 知子 12

考え、議論し、わかり合う道德をめざして

古本 寿子 16

社会を生き抜くための道德を

今井 政廣 20

子どもが育つ権利、子どもを育てる権利とはなにかを考える

垣内 国光 24

〔討論〕 国家が求める「よい子」づくりに流されないために

28

# ●サブ特集● 第5回陸前高田学校開催に向けて岩手県へ

【座談会】震災から9年 陸前高田市のくらし

36

前川慧一さんをたずねて宮古市へ

40

久慈市のひろば読者のみなさんと交流しました

42

# ●トピックス●

2週間おふろに入れず……デイサービス休業要請を受けて

小早川弘江 44

新型コロナウイルス感染症と向き合うために

～公衆衛生医師の視点と親の視点から～

吉田穂波・敦 46

中国・上海のいま

荒川 亜樹 52

ひろば読者のつどい——水野阿修羅さんを招いて

56

結成50周年をむかえた障連協

塩見 洋介 58

# ●連載●

阿修羅がゆく わたしが好きな釜ヶ崎（10）

水野阿修羅 62

相談室の窓から

あそびから見えるK男くんの思いや意欲のふくらみ

青木 道忠 64

育つ風景

いたずらの入るすきま

清水 玲子 66

ひととしてあたりまえに生きたい

大阪聴力障害者協会会長として（3）

清田 廣 68

映画案内 『グリーンブック』

吉村 英夫 70

現代の貧困を訪ねて

コロナウイルス不況と生活困窮

生田 武志 72

似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート

顔のない「似顔絵」じゃ！

ラッキー植松 74

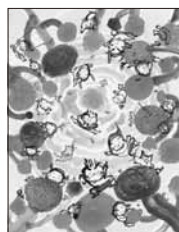
ホームレスから日本をみれば

ありむら潜 76

花咲け！ 男やもめ

川口モトコ 77

●表紙の絵●  
神門やす子



## 読み手が書き手に

元大阪千代田短期大学副学長 鴨井 慶雄さん

私は、大学卒業後、大阪市立盲学校で二四年、難波養護学校で一二年、大阪千代田短期大学で一六年、計五二年間、教員生活を送りました。その間、組合運動にとどまらず、障害者運動、研究運動にも携わってきました。大阪市立特殊学校教職員組合（市特教）の組合役員として教育・労働条件改善の運動にとりくみ、勤務評定反対闘争のときは父母・卒業生とともに「大阪特殊教育を守る会」（のちの「大阪障害児・者を守る会」）をつくりました。また、卒業生の有志による「視力障害者の生活を守る会」の結成や「点字民報」の発行を手助けし、それはやがて全日本視覚障害者協議会（全視協）の結成にもつながりました。安保条約改定反対闘争のあとは「障害者（児）を守る全大阪連絡協議会」（障連協）づくりや全国障害者問題研究会（全障研）の結成にもかかりました。

大阪福祉事業財団とのかかわりは、仕事の関係で、すみれ愛育館（障害児入所施設）の横山弘道館長（当時）や関目寮の浦山倫郎寮長（当時）らと親しくおつきあいさせていただきました。総合社会福祉研究所が創立される際には、研究所の名称をどうするかで熱っぽく議論したことなどが思い出されます。

『福祉のひろば』が届くと、私の知っている執筆者のページにすぐ目が行きます。ずっと長く連載されている青木道忠さんは、同じ教員出身ということもあり、親身な相談話に毎回教えられています。本になった千田勝夫さんと絹枝さんの「全盲夫婦の出会いから二人三脚のあゆみ」は連載中から楽しみに見ていました。現在掲載中の清田廣さんの連載も、私たち夫婦が仲人をさせてもらった関係もあり、真っ先に読んでいます。



## かもし よしお

1931年、台湾新竹市生まれ。京都大学教育学部卒業。大阪市立盲学校教諭、大阪市立難波養護学校教諭を経て、大阪千代田短期大学講師・助教授・教授・副学長。全国障害者問題研究会副委員長、社会福祉法人さつき福祉会理事長、社会福祉法人ヒューマン福祉会理事長などを歴任。

〔著書〕『子ども・障害のある人から見た明治150年——平和・自由・人権を』2019年、クリエイツかもがわ、1650円（税込）

本誌が、その時期、時期に起こる福祉の課題をいち早く取り上げ、特集を組み、問題提起をするスタイルは立派なものだし、たいへん参考になります。

私が敢えて言うとしたら、大局的な見方を堅持することと、足元をしっかりと見つめて行動するという姿勢が大事だということでしょうか。

安倍政権がこれほど国民の願いや要求からはほど遠い墮落した政治を続けているのにつぶれないのはなぜでしょう。新型コロナウイルスがいつ収まるのか気になるところですが、首相が専門家会議や側近にもはからず独断で学校の全国一律休校を突然発表する事態に、大きな混乱が起きていることもたいへん気がかりです。改憲に執念を燃やす首相のことです。緊急事態条項発動の予行演習かもしれません。

核戦争の危機、環境破壊の進行、貧富の格差拡大……。人類が地球の生命を絶滅に追い込む危険性も増す現代は、もしその英知を平和と平等、福祉向上の方向に切り替えていくならば、しあわせな未来が開けることになります。五〇年、一〇〇年、長期の見通しと広い視野をもち、足元の問題の解決に協力してとりくむ姿勢を堅持しましょう。

一人ひとりが主人公、雑誌の読み手が書き手になることが雑誌の存続に欠かせません。思いを文学に託すことも楽しみです。そういう欄ができていくことも望みます。そこで一句。

ふくよかな 雑誌づくりに 未来かけ



# だれのための保育・教育?!

この原稿を書いているのは四月六日ですが、明日、新型コロナウイルス感染拡大を防止するための緊急事態宣言が発令されるということです。期間はおおむね一か月なのですが、緊急事態宣言が発令されれば、娘の通う保育園は休園措置となります。かといって、高齢者が重症化しやすいと言われていたなかで、いつものように祖父母に頼ることもできず、仕事と子育てをどう両立させるのか、先が見えない状況です。医療や福祉現場で働く方にとっては、その混乱はよりいっそう深刻なものだと思います。

すでに外出制限がはじまっている欧州では、家庭内でのDVや虐待の相談件数が増えていると報道されています。日本でも、すでにはじまっている休校にともない、とくに障害のある子どもの親の過労・心労が問題になっています。今後、保育・障害・高齢などの社会福祉サービスが制限されれば、日々の生活が維持できず、健康を害してしまう人たちがたくさん出てくるのが懸念されます。経済的な補償ももちろん不可欠ですが、お金では解決できない対人支援の福祉サービスがいかに人々の日々の生活を支えていたのか、その重要性があらためて見えてきていると思います。この間の社会保障・社会福祉における公的責任の後退、市場化、人材不足などが、こうした緊急事態に人々の生活にどのような影響をもたらすのか、今後、本誌でもしつかり深め、分析していかなければいけないと思います。

さて、今号の座談会は、もともと三月二日に公開学習会として開催する予定でした。好評で参加申込みも多数いただきましたが、新型コロナウイルス感染拡大予防のため、報告者のみの座談会とさせていただきますました。

大前提として、人には自由に生きる権利があります。自分が生きたい生をまっとうする権利があります。しかし同時に、人は一人では生きていけません。一人ひとりの自由に生きる権利を尊重しつつ、同時に助け合い、支えあい、よりしあわせで楽しい人生を送るために、社会があるのだと思います。

「自由」と「共存」、この二つを最大限達成するために、自分と異なる意見や思いをもつ他人の存在を認め合い、譲り合ったり、助け合ったり、ときにはガマンすることになってきます。そのときに、いつていのルールやいわゆる「道徳心」のようなものが必要とされるのだと思いますが、それは一人ひとりの権利を守り、最大限自由を尊重するために、人とともに生きていくなかで自分自身で気づき、つちかっているのです。

そうしたことを生活のなかで体感し、なかまとともに学んでいく場が保育や教育の場だと思えますが、とくに日本の教育においては、そもそも一人ひとりが自由に考え、その思いが尊重されて生きる権利があるという前提がないがしろにされ、道徳心をもつこと自体が目的になっているように思えてなりません。

(編集主任)

